火災対策編

Ⅰ 火災が発生しないために

放火を除く大多数の火災は、ストーブ、たばこ、たき火といった、不注意から発生しています。日ごろの心がけ１つで火災を防ぐことができます。大切な命や財産を失わないよう、火を取り扱う場合には、十分に気を付けて、防火意識を持って慎重に行動しましょう。

～命を守る８のポイント～

【コンロ】

コンロを使用するときは、その場を離れない

・コンロの周りに燃えやすい物を置かない。
・コンロから離れるときは、必ず火を消す。

【たばこ】

寝たばこやポイ捨ては厳禁

・火のついたたばこを残したまま、その場を離れない。
・灰皿は大きめのものを用意し、常に水を入れておく。

【ストーブ】

周りに燃えやすいものを置かない

・その場から絶対に離れない。
・近くに水を入れたバケツを用意し、終わったら消火したことを確認する。

【コンセント】

不必要なプラグは抜く

・定期的にほこりを掃除する。
・決められた容量内で使用する。
・傷んだコードを使用し続けない。

火災対策編

【たき火】

風の強いときにたき火をしない

・周囲から燃えやすいものや危険物をかたづける。
・その場から絶対に離れない。
・そばにバケツを用意し、終わったら必ず火が消えたことを確かめる。

【放火】

家の周囲に燃えやすいものを置かない

・ごみは収集日の朝、指定された場所に出す。
・車庫、物置などの戸締まりをする。

【火遊び】

マッチやライターを子どもの手が届くところに置かない。

・日ごろから子どもに火の怖さや正しいマッチの使い方を教える。
・花火をする際には、必ず大人が付き添う。

【火元確認】

就寝前・外出前には必ず火元確認

・火元の安全を確認するときは、指をさしながら、「ガスの元栓よし」「ストーブよし」など声を出し、点検を行う。
・点検すべき項目を書いたメモを壁に貼り出し、それを見ながら確認する。

Ⅱ 火災が発生したら

初期消火の段階を超えてしまうと、自分たちだけで消火するのは危険です。二次災害が発生しないよう、「決して無理をしないこと」が鉄則です。

1. 周りに知らせる

「火事だ～！」と大声で叫んでください。
声が出なければ、やかんやバケツなどを叩き、異変を知らせましょう。

2. 119番通報は**正確かつ簡潔**に

119番に通報するときは次のことを正確に伝えましょう。

・まずは火災が発生したこと。
・場所（住所）。
・火災現場付近の目印。
・建物の種類（木造、鉄骨など）。
・脱出していない人やけが人の有無。
・自分の名前と電話番号。

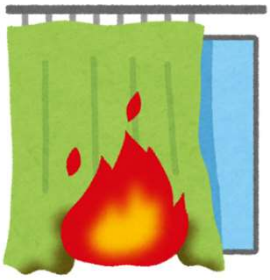
3. 脱出はすばやく

天井まで火が燃え移ったら、あっという間に燃え広がります。
自分たちだけで消火するのは諦めて、すばやく脱出してください。
ぬらしたハンカチで鼻と口を押さえ、姿勢を低くして移動しましょう。
一般的には、出火から３分以内に天井に火が燃え移り、
初期消火のレベルを超えてしまいます。

Ⅲ 消火のポイント（火元別）

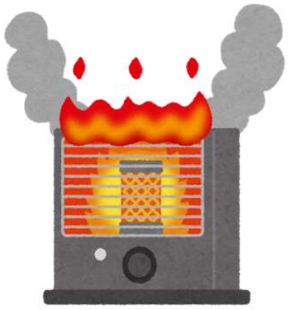
【油なべ】

　直接、水をかけるのは厳禁です。
　右図のように、なべにふたをしたり、ぬらしたタオルを用いて、なべ全体をおおう方法もあります。
　火が消えても完全に温度が下がるまでは、ふたやタオルをとらないようにしましょう。



【カーテン・ふすま】

　火が燃え上がるときの通り道となるので、天井まで火が燃え広がる前に、水や消火器で消火をしてください。
　間に合わなければカーテンは引きちぎり、ふすまや障子は、けり倒して消火をしてください。



【石油ストーブ】

　ぬらした毛布などをストーブにかぶせ、バケツの水を上から一気にかけます。
　消火した後でも、天板の余熱で再発火するケースがあるので注意をしましょう。

【衣類】

　衣類に火がついたら、転げ回って火を消します。すぐに脱げるものは、脱いで踏み消しましょう。
　風呂場の近くにいるときは、浴槽の残り湯を頭からかぶるか、浴槽の中に飛び込みましょう。

Ⅳ 消火器について

1．消火器の基礎知識

・火災の種類によってラベルが異なります。
どの火災に適した消火器か確認しておきましょう。

白→普通火災用（紙類などの可燃物が燃える火災）
黄→油火災用　（ガソリンなどの油類が燃える火災）
青→電気火災用（電線などの電気設備が燃える火災）

・説明書を読むだけでなく、防災訓練などに参加し、
実際に使用してみることが重要です。

・高温多湿を避けた場所に設置しましょう。
容器がさびついたり、ピンが変形したりしているものは
専門業者に点検を依頼しましょう。

・消火剤の交換時期は３年が目安と言われていますが、
最近販売されている消火器には交換時期を表示している
ものもありますので、確認してください。

2．消火器を使った消火方法

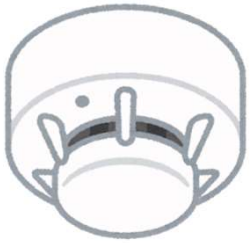
～消火器の使い方～

安全ピンを引き抜く→ホースをはずし火元に向ける→レバーを強く握る

火災と正面から向かい合わないよう、風上から消火しましょう。
自らの安全を考え、逃げ口を背にしてください。
また、腰を落とした低い姿勢で、熱や煙を避けてください。
炎や煙ではなく、燃えているもの本体にノズルを向けて、
左右に振りながら噴射するようにしましょう。

V 住宅用防災機器のススメ

【住宅用火災警報器】



火災で死亡する方の多くは、就寝中によるものです。
消防法により、すべての住宅に火災警報器の設置が義務付けられています。
逃げ遅れを防ぐために非常に有効です。
煙や熱を感知すると、警報音で知らせてくれます。
１年に１回は点検を行い、１０年を目安として、機器の交換をお勧めします。

【感震ブレーカー】

地震による強い揺れをセンサーが感知して、電気を遮断するものです。
漏電遮断機や消火器等とあわせて備えると、さらに効果的なものになります。

タイプ	価格	電気工事	メリット	デメリット
分電盤タイプ	約５万円 ～ ８万円	必要	・作動の信頼性が高い ・電気切断まで約３分間の猶予あり	・家屋内全ての電気が切断
コンセントタイプ	約５千円 ～ ２万円	必要･不要 両タイプ	・作動の信頼性が高い ・コンセントごとに電気の切断が可能	・電気切断までの猶予なし
簡易タイプ	約３千円 ～ ４千円	不要	・設置が容易	・作動の信頼性に劣る ・家屋内全ての電気が切断 ・電気切断までの猶予なし